
リコのバックボーン

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リコのバックボーン

【著者名】

ゆり

N6935Q

【あらすじ】

ポケモンとの意志疎通がとれるポケモントレーナー、フィルのパートナーであるルカリオのリコ。

そんな彼女は、フィルに懷こいつとしないツタージャのハルにフィルのことを知つてもうべく昔話を始めた。

(前書き)

この短編は「アムネシア」「シリエジオ」のネタバレを含みます。
この短編単体で楽しめるように努力はしましたが、先に上記の一作
を知っていると、より楽しめると思われます。

そろそろここら辺でキャンプを張りつ。まだまだ歩けるかも
しないけど、夕暮れ時だからね

私の主人、というよりは仲間であり親友であるフィルは誰に言うでもなくそう言った。たぶん、彼の言葉の後半部分は私の後ろについていくよに歩いていく新しい仲間 フィルがハルと名付けた、ツタージャ種のポケモンという今までに見たことのないポケモンに向けられたものだと思つ。

全ての地方の道路には番号が振られているが、この道路の番号が何番であったかは分からぬ。というよりは、私はそれを覚えようとして意識していないのだということに気付く。

確か、クロガネシティを出発してから山の中の洞窟を抜けた頃には、既に太陽は折り返し地点に来ていたはずだ。そう考へると時間が経つのは早い

時間？

ああ、時間といえば時の神としてこの地方に伝わる神話に記されている伝説のポケモン、ディアルガが思い起こされる。

彼 性別はないように思うが ともう一人の伝説のポケモン、パルキアにはフィルのことでお世話になつた。

どうしてフィルが私たちのことを恐れたのかは分からない。分からぬが、私たちが力をつけ始めたことが彼の恐怖心を煽ったのかかもしれない。

そうだ、ファイルはポケモン図鑑で私たち種とトナのようなサーナイト種のポケモンのことだ。感情や思考を察する能力があることを知っていた。先の推測と合わせて、彼は私たちに恐怖心を抱いたのだろう。

事実、私がルカリオに進化してから他の存在の波導を読み取り、どんな感情でいるか、という程度のことなら読み取れるようになつていた。この能力は自分の意志でオンオフが出来るし、私は常にオフにするように心がけている、というのはファイルにとつて理由にはならなかつたようだ。

とにかく、ディアルガとパルキアのお陰で、ファイルが私たちに恐怖心を抱くことは無くなつた。おまけに、彼に私たちの言葉が分かるようにしてくれたのだ。ファイルと話をすることは叶わぬ夢であると思っていたから、とても嬉しいおまけだと思つた。

ファイルは道はずれの草原に荷物を下ろし、大きな旅行用バッグの中からポケモントレーナーがよく使う野営用のテントを取り出した。リオルの頃から野宿の手伝いはやつていた。ルカリオに進化して背が高くなつてから、彼の手伝いをすることは楽になつた。

「トナ、リコ。悪いけど手伝ってくれるかい？」

「はい！」

「いつものことだろ？　すぐ終わらせてやるって」

「ありがとう。ハルにもおいおいは手伝つてもらうかも知れないから、見学してくれるかい？」

ファイルは草原のある大きな岩の上に立つて腕を組んでいるハルに言った。が、ハルはファイルの言葉につん、と首を動かして拒否の意を示した。

なんだか腹が立つたが、しかしハルは私の妹のよつた存在だ。殴りうとか波導弾で攻撃しようなんて考えは浮かばなかつた。

ハルは自分を呼ぶ時に使う言葉、確かに一人称とかいうそれを私がぶるからといって「あたし」というようにしたりして、それが無性に可愛かつた。歩くときも、トナの後ろにくつつくこともあつたが、私の方が背丈が近くてちょうど良いとでも思ったのか、私の後ろにくつつくことも可愛かつた。

後は、フィルに向けてのこの態度を改めてくれれば良いと思つただが……

この日の晩、私たちが食べたのは数個のオボンの実だけだつた。フィルの体の調子が悪いらしく、何かしらの料理を作ることが難しいのだという。

「だから人間つて駄目なのよね」

一瞬、ハルの背が私と同じくらいにまで伸びたのだとthoughtが、よく見れば岩の上が気に入つてか、そこに尻尾で座るよつたにして落ち着いていたハルが誰に言うでもなく言つていた。

「本当に弱いよね、人間つていうか、フィルつて」

こんなことをトナに聞かれたとしたら、彼ならハルを殴りかねないだろう。彼は何者かにフィルを馬鹿にされるのがたまらなく嫌なのだ。

トナが疲れたと言つて早く眠つてくれたのは、ハルの幸運が引き起こした出来事なのだ、と思つことにした。

「ねえハル」

「どうしたの、リコお姉ちゃん」

「フィルのこと、悪く言つて、止めてほしいです」

「どうして？ ハルのその問いは『ぐく自然に発せられた。なんであたしがそつしなきやいけないの、とでも言いたげに。」

「……」

「あたしには分からぬよな。どうしてリコお姉ちゃんもトナお兄ちゃんも、フィルと一緒に行動しようつて思つているのがが」

ハルは夜空を見上げながら言つた。

何を見ていらんのかが気になつて、それで彼女の視線を追つてみる。そこには暗雲に覆われた空が広がつていた。

明かりはといえば、テントから少し離れたところにあり、トナが寝ているところの近くにある焚き火と、雲の切れ間から差し込む月光だけだつた。

これであれば、房で波導を感知して視界を得たほうが良さそうだ。「……ハルは、フィルは私の主人たゞ考えていて、そして主人よりも強い私たちがどうして上に立たないんだつて、それで怒つています？」

小さく岩が息を吸つた。そんな風に聞こえて、私はハルの方に向き直る。彼女は驚きを隠すことなく、大きな目を更に大きくしていた。

「なんでそんな、あたしの気持ちが分かつたの？」

「ルカリオつていうのはそういう風に出来てゐるんです。隠しごとなんでしても、すぐにばれちゃいますよ」

「うう……分かつた」

少し落ち込んだ様子でハルは言つた。どこかで不満を抱えながら、しかしそれでもフィルへの複雑な怒りを背負つていていたのが分かつた。

ふと、私の頭にある考えが浮かんだ。

「話をしても良いですか？」

「何のお話？」

「私の昔話です。まだ十年と少ししか生きていませんが」

岩の上に座り続けるハルからは期待されることが分かった。私の中で、彼女が話を聞いてがっかりするのは確定してしまった。

ぐるぐる、と喉を鳴らしながら空を見上げる。うつむいて、月は雲のなかに入ってしまったようだ。

「私とトナは、十年前にフィルの父親からフィルが七歳になったのを記念されて贈られたんです」

「ふうん、それで、それから？」

「それから私たちは……私たちって、私とフィルとトナのことなんですね、よく外に出て一緒に遊びました」

「え？ リコお姉ちゃんとトナお兄ちゃんはそういう風にしてフィルと？」

「はい。小さい頃から一緒だったのに、すぐに仲良くなりました」
ちつ。ハルが舌打ちしたのは嫌でも分かった。彼女が考えているよりも私の聴覚は優れていますことを教えようかと思つたが、それは止めておこう。

フィルとトナと私は、よくフィルの家の近くにある、簡素な滑り

台と小さな砂場しかない小さな公園で走り回っていた。

私たち三人は親友なのだ、とは当時から思っていた。が、フィルが、というよりは人間がポケモンの言葉を理解することが出来ない、ということを時間が経つて悟った私はショックを受けた。それは私の隣にいた、私よりも背の低かったトナも同じだった。

何故、ポケモンと人間は完全な意思の疎通が取れないのだろうか。フィルが気を効かせてジェスチャーで私たちに気持ちを表現する、というのも完全な交流に繋がらなかつた。私も表情を十二分に引き出してフィルと意思の疎通を取ろうとしたが、それすらも不完全なものであつた。それは私にとつて苛立ちでしかなかつた。

いつからだつたか、フィルは私に「かわいいね」と言ってくれるようになつた。

おそらくはプラスの意味なのだろうとは思つていたが、その言葉がどのような意味を持つかは分からなかつた。フィルが十一歳になつた年になるまでは。

フィルの家の近所に家が建てられ始めて、それは一ヶ月もしないうちに完成した。

当然、その家には住人がやつてくる。フィルの母が私とトナに説明　　彼女はよく私たちに色々な話をしてくれたのだ　　してくれた。

その説明によると、シラサギ、という名字を持つ一家は、どうやら一人娘の「アヤ」のために家を建てたらしい。彼女は病氣がちで、田舎町の空氣を吸つた方が彼女の体のためになるであろうという考えでここに越してきたらしいのだ。

ファイルは人見知りをしない性格だった。誰にでも気軽に話し掛ける今の様子は昔から変わっていない。

それは当然シラサギの家に訪問するという行動を取りらせるし、すぐアヤと友達になつたことは言つまでもないだろう。

アヤが病氣がちであるというのは本当のことだつた。はつきりと聞いたのは確かファイルの口からだつたような気がするが、彼女が私たちと一緒に体を動かす遊びをしようとしなかつた、私たちを見て微笑んでいただけということから推測は出来たが。

アヤと友達になり、静かに彼女との交流を深めていったファイルは彼の両親にこんなことを言つた。

シラサギさんのとこのアヤちゃんはとてもかわいいんだよ、優しいんだよ 要約すれば、おそらくはそうだ。これで合っているはずだ。

ここで私は納得がいった。「かわいい」という言葉の意味は、対象を良い印象で捉えるということなのだな、と。

その時、同時に私の顔面が紅潮していくのが既にキルリアに進化していたトナに指摘されて、とても恥ずかしかつた。

そういうえば、ファイルの故郷であるマサラタウンには大きな「宝」がある。

ポケモン研究の第一人者 実は私も良くな分かつていないので
が オーキド博士、と呼ばれる人物がこの小さな町に大きな研究

所を構えているのだ。

また、ちょうどアヤと出会った頃のフィルと同じ程度の歳の少女たちは、彼から育てやすいとされる三種のポケモンを選び、彼らの進路を見つけるための旅に出ていく。

が、大抵は生半可な夢を持った者が多くて、簡単に「ポケモンマスターになる」だのなんだの言つていて、正直言つてあまり良い気分はしなかつた。何を甘いことを言つてているのだ、と軽蔑していたのだ。

さて、フィルは旅に出ることは無かつた。理由は「アヤが心配だから」というものだつた。

恐らく大半の人間は何を馬鹿なことを、と思うのだろう。しかし、フィルの両親、そしてフィルとトナと私の五者面談の形を取った家族会議にて、フィルは芯の通つた声でアヤが心配だから、と両親に言つた。トナが無言で頷いているのを見て、それは心の底から思つてのことなのだと確信した。

旅に出た町の少年少女たちが家に帰つてくると、旅先で捕まえ育ててきたという野性のポケモンたちと私たちを戦わせたい、とフィルに言うことがあつた。

フィルはその際、必ず私たちに戦う意志があるかとか、体調は万全かとか、今日は絶対に勝とうねとか、私たちを気遣う言葉をかけてくれた。

しかし、私たちは弱かつた。

旅に出た少年少女たちとそのパートナーは、多彩な戦闘経験を持つていた。

だがこちらはどうだ。ろくな戦闘経験もないのに、そんな彼らと戦うこと自体が間違っているのだと言われているようなものだ。

何度もおうと私たちは勝てなかつた。その末にトナはボロボロにされ、私は背中を爆発させられた、あの事件が起きた。それからフィルはポケモンバトルに消極的になつていた。そういえば、あのトレーナーは今どこで何をしているのだろう。

私はこんな話を聞いたことがある。天性の能力の低さ故にポケモンを捨てる、というトレーナーがいるという話だ。

私たちの場合は少し違う。ろくな戦闘経験を積む機会も無く出来が悪いかどうかなんてまだ分からぬ状態だつた。

が、恥ずべきことに私はフィルを疑つてしまつた。もしかしたら、力のない私たちを切り捨てるのではないだらうか。根拠のないその恐怖は、確実に私の全身を震えあがらせていつた。

そんなある日、フィルは言つた。君たちが僕の友達でいてくれるのが一番の幸せなんだ、と。ついでに、君たちに力を求めることがんて、僕は一切しないからね。その言葉を聞いて、私はそれまで抱えていた不安や罪悪感を少しだけ地に落とすことが出来た、ような気がした。

そう、私は一度、オーキドの研究所に盗みに入つたことがある。目的は「変わらずの石」を盗むこと。その動機は「進化したくない」ということにあつた。

……正直なことを言えば「リオルの体」に愛着がわいていたのだ。フィルから言われた「かわいい」という言葉は、確かに私の中で息づいていた。だから、進化した後の「ルカリオの体」になることは、私にとって苦痛だった。あれから「かわいい」という要素がどこか

ら浮かび上がってくるのだらうか。

そして私は盜みを成功させ、糸を通した変わらずの石を田立たないよつに首にかけ続けることにしていました。あの時までは。

いつまでも力を欲しないわけにもいかない。フィルの旅立ちの時が近づいていたからだ。

私たちがフィルと共に生活を初めて十年。フィルはアヤの代わりに「世界を見る」旅に出た。季節は、冬に移りゆく秋だった。

当時、私は自分の運の無さを恨んだ。

旅に出る前、フィルは私に最初の行き先を選ばせるといつてくじを引かせてくれたのだが、その結果がシンオウ地方だったのだ。

そこがとても寒い地方であることは知っていた。そして季節は冬……行きたかったんだあ、シンオウ！ なんて言つているフィルに心の中で謝つたのは言つまでもないだろ。

フィルが旅に出るとこどとは、当然私たちも共についていくと
いうことである。

旅をしながらであれば、実践経験は自然と豊富にたまっていくだろ。そうすれば、ルカリオの体になんてならなくても、十分にフィルを危険から守ることが出来るだらう。そつ、彼を守る盾にも剣にもなることが出来るはずだ。

私は、それを固く信じていた。

旅の道中、トナが異常な進化を遂げた。確かあれは湿原で有名な土地を訪れる途中だつたと思う。

その目的地まであと一息、といつとこりで唐突にキルリアであつたトナが激しく発光、サーナイトへと姿を変え……いや、思い出すのはやめよう。悪夢として、あの光景が蘇りそうだ。

それから、トナは自身の体に技のエネルギーを纏うという特殊能力を会得した。

私がはっけいを繰り出すよりも、彼のサイコキネシスのエネルギーを纏わせた打撃の方が遙かに破壊力があつたのは、認めたくはないが事実であった。

この時から、私は力への欲望と自身の姿への執着の板挟みにあつた。

あの葛藤は、今では私を私たらしめる大事な要素なのだと思うことにしてはいるが……時々、リオルの体にもどりたいな、と思つことは嘘ではない。

私たちにそれを咎める権利もなければそういうつもりもない。い

その湿原の町の観光を終え、アヤに向けての手紙も書き送ったフイルはあてもなく歩きたい、目的地を定めずにどこかの町に行こうと言ひ出した。

私たちにそれを咎める権利もなければそういうつもりもない。い

つものように暖かな格好をした彼の後ろについて一緒に歩きだした。

夕暮れ時になつて、いつものように道路の脇の草原にテントを張る手伝いをしたり、薪を取つたり、野性のポケモンが襲つてこないかと怯えながら見張りをしたり……それらは旅をしてからの私の日常となつていた。

それから焚き火の近くで夕食を取つたのだが、今と変わらずフィルは料理が苦手だ。

出来るといえど出来るのだが、フィルと共に旅をする私にとって、料理及び食事とはポケセンの食堂で注文したものか、何の手も加えられていない木の実だけだった。

トナはその日の晩は「木の実スープ」というフィルの料理をおいしいと言つて飲んでいた。

フィルは苦々しい表情を浮かべながら、笑顔を浮かべるトナに向けてありがとうね、と言つていた。

トナの舌は馬鹿なのだ、どんなものでも美味しいと感じるなんてそう思つていると、お前がな、とトナに言わてしまつた。味音痴にそんなことを言われたくなかった。

その一方で、フィルは私に木の実を渡してくれた。紫の部分がある木の実など初めて見たが、かじりついてみるとそれはとても美味しかつ

「馬鹿、やめろ！」

トナがいきなり大声を出して、それに驚いてしまつた私はかじりついた木の実を一気に口の中に入れて食べてしまつた。

トナの鳴き声と私の木の実の食べ様はフィルの表情を一変させた。ああ、やつちまつた　彼の表情はそんなことを物語つていた。

フィルが私に食べさせてくれたのはカゴという種の木の実だった。これには眠気を吹き飛ばす作用があり、これをポケモンバトルに応用することが出来るんだ、と前にフィルから聞いたことがあるが、それは大きな問題ではない。

カゴという木の実を食べると眠気は吹き飛ぶ。そこに問題がある。月が顔を見せる時間だった。こんな時に数時間にも効果が及ぶカゴの実を食べてしまつと、翌日の旅路に支障が出てしまう。

フィルは両膝をついて何度も私に謝つたが、私はそれを気にしないといふという旨のジエスチャーを出して答えた。よくよく考えてみれば、私が夜の見張りを受け持つ時間が長くなり、結果として何者かに襲われたとしてもきっとうまく対処出来ることに気付いたからだつた。

嘘だつた。自らを納得させるための嘘だつた。

嘘が嫌いなトナが私に怒つて右腕を妖しく染め上げたのはいき過ぎだとしても、何嘘を吐いてんだリコオ、と彼が言いだすのは納得は

それは誤解だつた。トナは音もなく近寄ってきた敵意ある侵入者を撃退せんとして戦闘態勢に入つたのだ、ということに気付いたのは、トナが力なく倒れこんでしまつた時だつた。

フィルはそれを見て驚き、しかし何の言葉を発することなく、アクション映画のやられ役のように倒れこんでしまつた。

焚き火だけが私たちを照らす暗闇の中、私がここに留まるのは明

らかに危険な行為だつた。

電光石火でここから離脱、どうにか暗闇に目を凝らして侵入者の正体を特定し、可能であれば撃退を試みなければ――ここまで考えが回つて、強烈な眠気が私を襲つた。

トナとフィルのように私も力なく倒れこみ、しかし私はまだ意識を保っていた。

それからしばらくして、侵入者がその姿を露にした。

黒ずくめの男とスリープ。虚ろな意識の中、どうにか仮説を立てていく。

彼らは強盗か何かの犯罪者だ。そして、私たち全員を眠りに落としこんだのはあのスリープだろう。

彼らは……私たちを全員眠らせた後に金品の類を盗んでいくに違いない。いや、フィルは金持ちではないから放置される可能性も無いことはないだろうが……それでも、今ここで何かを盗まれるとうことはかなりますいだろう。

そんなことより、第一にしてこんな不意討ちをかける時点でおかいと気付くべきなのだ。彼らは疑いよつもなく敵だ。敵性因子だ。ならば排除せねばならない。

しかし……体が動かなかつた。カゴの実を少し食べたおかげで完全な眠りにおちていないとほいえ、動けないのであれば戦闘不能状態であるのと同等だつた。

ふと、焦りに包まれつづあつた私の頭にファイルの言葉が蘇つた。それは確かその日の朝の出来事だつたはずだ。彼は本屋に立ち寄り、ポケモン研究関連の雑誌を購入していた。

これを読み進めたフィルが私たちに言つたのは、ポケモンは進化することで状態異常を克服するケースがあるというものだった。なるほど、前にトナガラルトスからキルリアに進化する際に体が爆発するかと思うほどに力に満ち満ちた瞬間があつた、と彼自身があつたことがある。恐らくはその力によつて状態異常を治療、回復するのだろう。

「ここで変わらずの石を放棄すれば、私はルカリオに進化して侵入者を撃退することが出来るだろう。幸い、変わらずの石を結ぶ糸を引きちぎる程度の力なら残されている。

だが、こんな状況でも半分死んでいた意識は「リオルの体」に固執していた。進化して「ルカリオの体」になつてこの眠気を打破して侵入者を撃破、そこまでいかなくても撤退させれば良い。それしか道はないことを私は知つていた。

なのにどうして私はこの姿でいることに、フィルから「かわいい」と言われることに固執してしまつのだ？

ほぼ死にかけた意識の中、男はスリーピーと共にテントの中に足を踏み入れていく。

それからフィルの大きな円筒状の旅行用バッグを焚き火の方に、つまりは私たちが倒れこんでいるほうに持つてきて中身を調べあげようとした。

明かり欲しさにこちらに来たのか？と勘ぐつていると、

「どうやら絵描きの兄ちゃんらしいな……ん、なんだこりや？」

不意に黒いグローブをはめた黒ずくめの男は言った。彼の黒い右

手に、私の似顔絵がつままれていた。

「リオル？ このリオル、リコつていうのか……ああっ！」

しまった。私が完全な眠りについていないことに気付かれたのだ！

「スリープ、このリオルに催眠術だ！」

男のそばに立っているスリープは無言で両目を光らせ、それを見てからの私の手は半ば勝手に変わらずの石を結ぶ糸を引きちぎっていた。

その瞬間、私の視界は白く染まった。

それと同時に自分の内側から言ひようのない「何か」が爆発していくのが分かる。それによつて自分の体が細切れになつたのを感じ

一瞬のその感覚の後、自らの体が再構成されていくのを感じた。

体の底から湧き上がる「力」を感じ、目を開けると同時に私は悟つた。今の私はリオルではないということに。

「なつ……る、ルカリオオツ！？」

男が間抜けな声を出し、スリープも完全に腰が引けていた。

その様子を見ながら、五感以外にもう一つの感覚が芽生えつつあることを自覚した。

ルカリオは「波導ポケモン」と呼ばれることがある。

ファイルが読み聞かせてくれた絵本には「波導の勇者の従者」ともあつたような気がするが、そんなのはどうでもいい。

あらゆる存在が放つ「波導」と呼ばれる存在を感じることがで

きる」ことが、ルカリオが「波導ポケモン」と呼ばれる所以なのだ、
ということを誰かから聞いたことがあった。

恐らくはそれなのだ。この男に何かを盗んでやろうという気持ち
が欠如しているのが、そしてスリープにも戦闘意欲がすっかり失せ
ていることが分かったのは。

「ひひやあ！ もめ、戻れスリープ！」

男はモンスター ボールにスリープを戻し、奇声を上げながら全速
力で逃げていった。

男が最後に残した感情は「恐怖」だった。やはりこの「ルカリオ
の体」は恐ろしいのだろうか。

倒れて眠り続けるフィルの方を見る。すうすう寝息をたて、何事
もなかつたかのように眠っていた。

ふと、その姿が滲んで見えることに気がついた。私は泣いている
のだ そのことに気がつくまで、しばらく時間がかかった。

日が昇るまでにどれほどの時間が経つたのだろうか。波導を感じ
る第六感に慣れるためだと言い聞かせ、食べかけだったカゴの実を
口の中に入れて眠ることなく私はテントの傍で棒立ちしていた。
がさ、と私の背後 焚き火の近くで何かが動いて雑草がこすれ
る音が聞こえ、私はそちらに目をやろうとして止めた。せっかく波

導感知という第六感を伸ばそうとしているのだ、それで誰が動いたかを感じ取ればいい。

そう考えた私は別の理由で振り返られなくなつた。音の主は田を覚ましたファイルだつたからだ。

すぐに彼が息を呑む音が聞こえた。まだ波導で他者の感情を読むことをコントロール出来なかつたので、彼のそれは筒抜け、丸見えだつた。

「あ……」

ファイルは私の後ろ姿を見て、しかし彼の見ているルカリオがリコという名の私であることに気がつかなかつたようだ。いや、気がつけないのだろう。

やはり、ルカリオとなつてしまつた私をファイルが受け入れるはずが無いのだ。彼が「かわいい」と言つていたリオルの私はもうない。ルカリオとしての私など、ファイルは必要としていないの

「あ、やつぱりリコだ」

柔らかい声でファイルは確かにそう言つた。

「おいでよ。ほら、一緒にトナを起こそう」

その声と波導に、私が恐れていた要素はなかつた。ファイルはいつもと同じように、昨日までリオルであつた私に向けていたような、あの柔らかい声で呼びかけてくれた。

「リコ、何をそんなにいじけているの？」

いじける？

「リコはいつも不安そうな時、尻尾を地面にすりすりさせてしているんだよ。だから僕には君がリコだつて分かるんだ。だからほら、こっちを向いてよ」

ぐるる、と私の喉が鳴る。

はいと答えるもファイルには届かない。

だから私は右脚を軸にバックターン、ファイルの方を向いて彼の笑顔を見て、自然と私にも笑顔が浮かんてくるのが分かつた。

私はそんなようなことをハルに語りかけた。

途中でハルが茶々を入れることが無かつたのには正直驚いている。彼女は人間が、というよりはファイルのことが嫌いなので、彼を良く言つ私の主張に横槍を入れてくるのだろうと考えていたからだ。

「……それで？」

「ファイルは私にこう言いました。『うん。リコはリコだよ。だってこんなにかわいいんだもん』って」

「そんなの嘘じやない。だって、昨日ファイルの絵を見たけど、リオル種とルカリオ種では印象は……」

「嘘じやありませんよ。ファイルの体から出ていた波導をちゃんと感じていましたから」

ええ、とハルは納得のいかないような声を上げる。

「ね、ファイルはとつてもいい人なんですよ。だからハルもちゃんとファイルと向き合ってください」

いつもなら とは言つても彼女がタマゴから孵つたのは数日前の話だが ハルは嫌だ、と返すだろう。

だが、この時の彼女の言葉には耳を疑つた。

「……ちょっとだけね。ちょっとだけ」

小さくハルは言つて、尻尾を落ち着けていた岩から飛び降りる。それからハルは私を見上げて口を開いた。

「大丈夫。リコお姉ちゃんのお話を聞いて、ファイルはいい人なんだなって分かったから」

「さつきはそんなの嘘じやない、なんて言つていたのに？」

「うん。だって、リコお姉ちゃんの顔は嘘を吐いている顔じやなかつたから」

素直な言葉だつた。そのくらい、波導を読まなくとも分かる。

私はファイルのどこが好きなのだろう。ふと、薄く笑みを浮かべているハルの横顔を見て私は自問した。

その答えはすぐに導かれた。私は、ファイルが小さい頃から彼を好いていた。アヤも、彼を好いていることを私に打ち明けたことがある。

私はね、ファイルの「てんいむほう」な人柄が好きよ

てんいむほう。人間の間でどんな字をあてるのかは分からないうが、意味なら分かる。

人柄に飾り気が無く、素直で、無邪氣であること。

ファイルは何か飾つた所もないし、とても素直だし、何か疾しいことを考えたりすることもない。時々嘘は吐くが、それは私たちを傷つけまいとしてのものが多い、というよりはそれしかない。

そうだ、私はファイルの「てんいむほう」な人柄に惹かれているのだ。

それ故に彼はこの世界で生きることが難しいということもあるだろう。そんな時は、私は彼の盾に、そして剣になろう。

旅に出る前日、私は同じことを考えていたことを思い出し
して、笑った。

そ

(後書き)

いかがでしたでしょうか。楽しんで頂けたら幸いござります
つて、リコじゃないの。どうしたのこんなとこへ？……

リコ「はじめまして！ って、私ひで出でたいいんですか？」

うん。ここなら別に問題はないよ。

リコ「そつなんですか。といひで、てんこむぼうひじりこいつを
書くんですか？」

え、なに、君は字を書きたいのかい？ ほら、これいれいれ（
キュツキュツ）

リコ「天衣無縫って書くんですね？ 難しい字ですね……」

右手の刺の使い方、上手いよねえ。そんなに器用なら、ファイルに字
を教えてって頼んでみたらどうかな。ほら、字を書けるポケモンつ
てあまりいないじゃないのさ。

リコ「それいいですね！ 頂きましたよその案！ それでは～！」

あ、神速でどつか行つちやつた……

さて、この短編は「シリエジオ」の主人公、フィルの仲間であるル
カリオ、リコの過去のお話を描いたものです。

「シリエジオ」のエピローグで仲間になつたツタージャのハルに向けてリコが語つた、という内容になりましたが、実はこれにトランスレータシリーズの三つ目の長編「パンドラ」に出てくる要素のヒントが隠されています。

これはレギュラに深く関わるものなのですが、ネタバレにならないように解説しますね。

(一部の限られた) 人間もポケモンも、実は大きな「力」を有しています。

しかし「力」を発するには人間の器はあまりにも小さく、ポケモンですら「力」を十分に発することは出来ません。

それは「心」による制限を定められているからです。その「心」による制限を解除することで、人間であれば波導使いになることが、ポケモンであればチートじみた実力を發揮することが出来ます。

心の制限解除には、ポケモンであれば進化することで行使できる「力」の強さが増します。人間とポケモンに共通する解除方法は、心に強いインパクトを与えるか、地道な修行の積み重ねることです。

ただ進化するだけでは心を解放するに至りません。心に強いインパクトを与えることが、心を解放する条件になります。

「」の「」、既に心を解放させたフィルのパートナーのサーナイト、トナは「技のエネルギーを身に纏う」能力を、リーフは「波導系の技を使った身体能力強化」手段を会得しました。

そのチートっぷりは「シリエジオ」でなんざん描[写]しましたが、実はこれでも「力」を十分に發揮したとは言えないんです。

そこが「パンドラ」にて明かされます。どのような手段をもつてすれば「力」を十分に發揮することが出来るのか、というのが「パンドラ」の重要な部分の五割は占めています。

以上、宣伝を兼ねた後書きでした。それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6935q/>

リコのバックボーン

2011年5月19日19時45分発行